

ほろにか

令和4年4月15日
全国卸売酒販組合中央会

『不要不急』

東北卸売酒販組合
理事長 山口 哲行

先日、新型コロナウイルスワクチン接種に行ってきました。3回目となる今回、正直なところ、前々回・前回に比べてモチベーションはかなり下がりました。前の接種は、とりあえずこれをやれば状況が改善するし、リスクも大幅に減るだろうと思っていましたが、今回は「う～ん」っていう感じ。多分、やっておいたほうが社会的な不自由は減るだろうと思って接種しましたが、今までの2回は「ファイザー」だったのが、「モデルナ武田」にブランドチェンジしたせいか、副反応も結構キツくて、2日間会社を休む羽目になり、参りました。

2年前には、得体が知れなくて、恐怖しか感じなかった新型コロナウイルス感染症。2年回って、世の中の受け止め方も変わってきたように感じます。今、この原稿を書いている4月初めの時点で、日々の新規感染者数は高止まり状態です。多分多くの人にとって、この病気が日常化してきたのかもしれない。

『不要不急』は、2年前、クルーズ船が大騒ぎになったり、志村けんさんが亡くなったりした当時、日常的に使われるようになりだした言葉です。コロナ絡みで最初に使われたのは、2020年1月23日。外務省が「中国に滞在したり、滞在を予定している日本人を対象に武漢への不要不急の渡航をやめるように」と呼び掛けたものでした。その後、緊急事態宣言が発出された2020年4月7日前後から、多くの自治体から「不要不急の外出を控えましょう」というメッセージが出され、すっかり定着しました。『広辞苑』によれば「どうしても必要というわけでもなく、急いである必要もないこと」を、言うそうです。多分、自分の行動の大半がこれに区分されてしまいそう。ところが、この言葉が、想像以上のパワーワードになってしまいました。

今年の初め、東京・神保町にある単館映画館「岩波ホール」が、今年7月29日に閉館することを発表しました。岩波ホールは1968年2月に多目的ホールとして開館。その後、74年に川喜多かしこと高野悦子が名作映画上映運動「エキブ・ド・シネマ」をスタートさせ、都内屈指の単館映画館として活動してきました。しかしながら、新型コロナウイルスの影響で急激に経営環境が変化。運営が困難になったため、54年の幕を下ろすことを決めたそうです。

作品を見るだけなら、動画配信やレンタルDVDで事足りてしまいますが、やはり映画館で見るのと自宅で見るとは、見たときの印象が全然違います。

映画料金は、コンテンツの視聴料だけではなく、映画館の空間で映画を見るという「体験」にお金を払う、アトラクションの代金のようなものだと思います。残念ながら、コロナ禍で、そのような「体験」は「不要不急」に括られてしまったのでしょうか。

昨年5月、文化庁は、長官名義で「文化芸術に関わる全ての皆様へ」というメッセージを発出しました。「新型コロナウイルス禍の未曾有の困難と不安の中で、人々に安らぎと勇気、明日への希望を与えたのが、文化・芸術である。文化芸術活動は、断じて不要不急ではない。このような状況であるからこそ、社会全体の健康や幸福を維持し、人々が生きていく上で、必要不可欠なものであると確信している。」という言葉で締めています。

私たちが扱う「酒類」業界も状況は同じようなもの。2年前、初めての緊急事態宣言の時には、居酒屋などの飲食店には、午後8時までなどの時短要請が出され、昨年緊急事態宣言の時は「休業要請」の対象に、お酒を提供する居酒屋などの飲食店が加わりました。「補助金」「支援金」の支給はありましたが、多くの飲食店が廃業に追い込まれました。

実際に感染が急拡大する中で、感染防止対策として当然だったとは思いますが、今後、「ウィズコロナ」と呼ばれるフェーズに移行する際に、この状況のまま大丈夫なのか、十分に考えないといけないと考えています。

「文化芸術」と同じように「お酒」は「人間が人間らしい生活を送るための商品」ではないでしょうか。生きていく上では必要不可欠ではないかもしれませんが、人々の心や人生を豊かにするものを提案することが、私たちの仕事です。

感染対策はもちろん大切で、手洗いや手指消毒、マスクの正しい着用、人混みを避ける、こまめな換気など、リスクを避けることが一番です。その上で、安心して「不要不急」を楽しめる「ウィズコロナ」の時代を作っていければと思います。

「なくてもいいと言われるものと、私の心は生きていく」

「西武・そごう」が今年の元日に、全国紙などに掲出したコーポレートメッセージです。よくわかります。